

---

---

# テキスト解釈における地平融合の過程

佐々木一也

〈立教大学〉

---

H.-G. ガダマー（1900～2002）による解釈学的哲学（hermeneutische Philosophie, hermeneutic philosophy）に依拠しつつ、テキスト理解の成立過程にまつわる問題に光を当てるのが目的。

仮説：解釈者がテキストの理解を生きてみて、その理解内容が自分の生に合うように可能な限り修正を重ねる作業を繰り返すことによって、解釈者とテキストとの間に共に生きたという時間を含む経験の蓄積を作る。その経験が解釈者とテキストにとって新たな第三の伝統になる。その伝統を共有する両者間ではじめて、テキストの真理主張をその段階で引き受ける解釈者によるテキスト理解が成立する。言い換えると地平融合が成立する。

この仮説が成り立つかどうか、ガダマーの地平融合、真理主張、影響作用史の概念を用いて検討し、成立することを確認する。

\* \* \*

解釈におけるテキストの部分と全体の相互関係が生み出す循環、いわゆる解釈学的循環（hermeneutical circle）をすべての理解（understanding）の前提とする哲学がある。それを解釈学的哲学（hermeneutic philosophy）あるいは単に解釈学（hermeneutics）という。本発表はこの意味での解釈学をドイツのガダマー（Hans-Georg Gadamer）による説明に依拠しつつ、さらにそれを発表者が敷衍して、テキスト解釈の成立過程で起こる事象、すなわち地平の融合（fusion of horizons）の成立を確認することを目的とする。まずは、ガダマーが『真理と方法（*Truth and Method*）』の中で論じている地平融合の過程を、論者の考察を加えて明らかにし、その上で、地平融合一般の過程を論じて、それを可能にする条件を明らかにする。

## 1. 地平融合の諸前提

ガダマーが論じる解釈学では、テキスト理解には以下の諸点が必然的に伴うと考えられる。

### (1) テキスト理解の文化的伝統による被拘束性

解釈学的循環は理解対象のテキストの部分と全体の間だけの問題に限定されない。解釈者が予め持っている先入観（prejudice）とテキストを読むことにより取り入れられる知識とが相互に影響し合って循環を形成する。解釈者はすでに持っている知識や世界観を自らの認識の「地平（horizon）」として前提している。地平とは視野の限界を持つ認識を成立させる状況（situation）である。「地平とは、特定の観点から見えるすべてのものを含んだ一定の範囲の視野のことである。」（ガダマー原著、ウエインスヘイマー、マーシャル英訳『真理と方法』2006年、301頁。以下 TM と略す。）人はどの地平に立つかによって、見えるものが違ってくるといえる。地平は人の認識の制約である。人は自分の地平からしかものを見ることができない。だが、人は地平を超えてみることもできる（TM301）。それが地平融合の可能性を拓く。いずれにしても、それは読解主

体にとっては価値評価の基準として機能する。つまり、何かが自分に近いか遠いか、大きく見えるか小さく見えるか、などについてである (TM302)。だから、それは解釈者にとっては先入観である。ガダマーにとって先入観は否定的概念ではない。むしろ「先入観概念を根本的に復権させることが必然的なのだ (TM278)。」「正当な先入観というものもある (TM278)。」そしてそれは対象としてのテキストを理解する際の枠組み (scheme)、あるいは誤解の原因のひとつとなる。ただし、先入観による誤解は、解釈学では必ずしも間違っただ、あるいは正しくない理解とは考えられない。なぜならば、解釈学はテキストそのもの (text in itself) は解釈者に知られることがないと考えられるためであり、先入観に依存しないテキスト理解は不可能だと考えるからである。テキストは読まれなければならない、読まれないテキストは物理的存在者としての書物ではあっても、テキストとしての意味を持たない。

テキストを読む主体 (解釈者) は必ず特定の先入観を持った人であり、テキスト理解は解釈者とテキストとの間での相互影響関係において成立する。先入観は解釈者が無意識のうちに取り込んでしまっている知識であり、それは解釈者が属する文化的伝統のなかで醸成される。同じ伝統に属する者同士は、各自の固有経験による先入観とともに伝統による先入観を持っており、両者の先入観には共通部分がある。文化的伝統は人の先入観の最下層の基礎をなす。人は皆先入観を持ち、それが文化的伝統に一部依存するゆえに、テキスト理解は文化的伝統に影響される。

## (2) テキスト理解の基盤となる準拠テキスト群

テキスト理解に影響を与える文化的伝統の中には、理解対象となっているテキスト以外に多くのテキストを含む。そしてそれらが読まれた結果としてのテキスト理解が蓄積される。これらすべてが文化的伝統の一部となる。テキスト読解の主体はそれらのテキストの多くの人々による読解と理解の蓄積を必ず参照する。人は、少なくとも読解力養成の段階で、多くのテキストについての多くの人々の読解結果を学ぶ。その結果、テキスト読解の主体 (解釈者) は特定のテキストを、他のテキスト読解との繋がりを持って読み、理解することになる。テキストが解釈者によって読まれることによって真にテキストであるとすれば、テキスト同士は解釈者に読まれることによって相互に連携していることになる。文化的伝統にはそれに固有の正統的テキストとその読解の蓄積が存在する。その上に、多様な個別の解釈者がそれぞれに固有な読書体験を積み重ねてゆくことになる。それが解釈者の先入観を形成する。その結果、特定の解釈者あるいは特定の繋がりのある、言い換えれば、読書傾向を同じくする解釈者同士の集団は、ひとまとまりのあるテキストの集団 (cluster) を形成する。その集団を基盤とする読解経験の蓄積が解釈者の先入観の第2層の基礎を形成する。このテキスト群をここでは準拠テキスト群と呼んでおこう。なぜならば、このテキスト群の解釈と理解の内容が準拠基盤として解釈者の先入観の中核を形成するからである。

## (3) テキストの地平と解釈者の地平の時間的隔たり

テキストには作者がいる。作者は特定の時代の地平に基づいてテキストを作成する。それは人間の有限性 (limitedness) によって必然的である。また、テキストの解釈者は彼が属する特定の時代の地平に基づいてテキストを読む。これもまた必然である。両者の地平には一致する必然性がない。地平が重なる場合には、同時代的な関係で解釈者は作者に近い立場で読むことができる。それに対し、地平が異なる場合には、作者の地平、すなわち過去の地平に解釈者が合わせて読むか、あるいは、解釈者の地平、すなわち現在の地平に作者とテキストを持ち込んで読むか、いずれかである。前者の場合、解釈者が過去の地平に自分を合わせることは不可能である。現代において過去を客観的に再構成できるとする歴史主義 (historicism) と同様、それは有限者である人間の力を越えたことであるので不可能である。後者の場合、過去を現代に合わせて理解しようとするもので、歴史を越えた普遍的理解が現代において可能だと考える誤った歴史主義に陥る。それゆえに、テキストと解釈者の時間的隔たり (temporal distance) は簡単には克服されない。言い換えれば、解

釈者はテキストを自分の地平から一方的に解釈せざるを得ない。

#### (4) 地平融合を導くものとしての真理要求 (claim to truth)

ガダマーは、テキストと解釈者の間の時間的隔たりの克服は地平融合 (fusion of horizons) によって初めて可能になると言う。地平の融合は解釈者がテキストの真理要求 (claim to truth) を認めることから可能になる。人がテキストを読むとき、人は完全性の先行把握 (fore-conception of completeness) を持つ。「我々がテキストを読むとき我々はいつもその完全性を想定する (TM294)。」「読者は単に意味内容の内的統一性を想定するだけでなく、読者の理解はテキスト内容の真理との関係から発する意味の超越的期待を持ち続けることによって同様に導かれるのだ (TM294)」「今や我々は個別性やそれ (テキスト) が考えることには関心がなく、それが言うことの真理に関心を持つゆえに、テキストは単なる生の表出ではなく、それが行う真理要求として真摯に受け止められる (TM296)。」解釈者がテキストの意味の完全性を想定できるということは、そのテキストの内容を真理への要求として真摯に受け取っているということなのだ。あたかもテキストが解釈者を引き寄せる力を持っているかのようである。思うに、その力の源は、そのテキストを既に読んだ他の解釈者たちによる評判だったり、他のテキストを理解するための前提となっていたり、指導者から読むよう命じられたり、偶然それと出会って関心を持ったり、というようなことだろう。いずれの場合でも、解釈者にとってはそのテキストが読む価値があると思われるのであるが、それを言いかえれば、テキストが解釈者に対して読むことを要求するのである。解釈者がその要求を受け容れる根拠は、そのテキストが少なくとも解釈者にとってある真理を開示してくれる、と思わせられることだ。それがテキストの真理要求、あるいは真理主張、すなわち claim to truth といわれるものだ。前提とする地平の異なるテキストと解釈者が結びつけられるのは、そこに普遍的であるはずの真理が介在するからだ。テキストの真理要求を解釈者が受け容れることによって、両者の地平は融合し、そこに解釈者の立場からすれば、その地平に位置づく新たなテキスト理解が成立するのである。

#### (5) 地平融合に必然的に伴われる解釈者の世界観の変容

地平融合は解釈者の地平の立場からすれば、自らの地平が変化することを意味する。解釈者は既に伝統に属している限りは、その中で経験に基づき、解釈者の時代の伝統を自らの地平の一部として持っている。その一方で、解釈者の時代に起こりうる新しい経験に基づく部分もある。それらの中には伝統的でないものも含まれる。過去のテキストを読み、理解することは、地平融合により、解釈者がより過去の伝統に近づくことを意味する。これは解釈者の変化である。それによって解釈者は自分の時代の新しい経験を、新しい経験にもとづいて作られるテキストを、より深く伝統に根ざして理解ができるようになる。だが、過去からの伝統の地平にとっては、このことは伝統に新しい要素が加わることを意味する。伝統とは常に、その最先端の時代において解釈者の理解を制約する先行的状況である地平として機能するものであり、その自覚された部分がそれとして概念化されるのだ。伝統も過去のテキストを含んでいて、その中には古典と呼ばれる評価が定着し、その後のテキスト解釈の準拠となり得るものもある。それらの準拠テキスト群の理解の蓄積によって最先端の現代のテキスト理解を制約しながら、逆に最先端のテキストによって準拠テキストの理解が更新されてしまうこともある。このように解釈者と伝統が相互に更新させあう関係が進行することが「影響作用史 (effective history)」である。

影響作用史は自覚的であるなしかかわらず、人がテキストを読むときには必然的に起こる事態なのだが、そのことは自覚を加えても可能だと思われる。人はテキストを読んで理解しようとするとき、その前提とする準拠テキスト群およびその理解の蓄積を選択することができる。伝統には無数のテキストとその理解の蓄積がある。それらの間には、必ずしも統一性はない。伝統の中には、重視するテキストの選択の差異により複数の準拠テキスト群の組み方が存在し、それらについての理解の仕方についても多様性がある。人はその

中のどれかを選択するのである。もちろん、その選択の動機は自覚的でないこともある。その選択動機の根拠を自覚しようとたどっていけば、どこかで無自覚な層に突き当たる。底なしの伝統の深さを考えれば、人の自覚には限界がある。だから、選択の動機を詮索することは敢えてしない。その上で、テキスト群と理解の仕方を自覚的に選択する場合を考えると、人は影響作用史の方向性を自覚的に制御することができる。言い換えれば、同じ伝統に所属していても、伝統の捉え方やそれからの影響の受け方には多様性があるということだ。ガダマーはそれに対して「権威 (authority)」という概念を導入して統一を図ろうとするが、ミクロな視点に立てば実際には多様な影響作用史が行われている。マクロな視点に立てば伝統の流れに一定の全体的方向性が見える、ということになるのだろう。結局、伝統はどのような流れを主流とするかどうかは、後の時代になってどの伝統的テキスト群の組み方を多くの解釈者が支持し前提としているか、どのような理解の仕方が新しいテキスト理解に際して依拠すべき方法と多くの人々によって認められているか、ということに依存する。後世になってからしか判明しないのである。

このように影響作用史の中で地平融合が進行し、いずれにしても、人は地平を変容させながら、テキスト理解を進めてゆくのである。

#### (6) 空間的隔たりという地平融合の限界

地平融合には見落としとしてはならない点がある。それはテキストの真理要求に導かれて解釈者の地平とテキストの地平が融合するという出来事が、同じ伝統に属する解釈者とテキストとの時間的隔たりの中で成立するということである。地平融合は同一の伝統内でのテキストと解釈者の時間的隔たりを克服する事象だ、というべきである。伝統を異にする異文化同士の関係にあるテキストと解釈者の間には、同じ現象は起こらない。なぜならば、両者の間に共通の真理が成立しにくいからである。ここでいわれる真理とは何か。それはガダマーによれば精神科学の真理であり、自然科学的方法論によらず、哲学、芸術、歴史といった学問文化において人が経験することの中で伝達されるものだという (TMxxi)。これを言い換えれば、ここでいう真理とは、テキストが表出することの内、その地平の中で多くの人が、哲学的、芸術的、歴史的経験として受け容れることができる内容である。これは数学や物理学の真理のように、時間空間を超越してプラトンの言うアイデアのように実在するようなものではない。哲学、芸術、歴史は地平に深く根ざした経験を引き起こす。それは地平を異にするもの同士での伝達が可能であるような経験ではない。

真理要求が通じるのは、それ要求する真理が単に普遍的であるからではない。実は、地平自身のうちに制約を越える要素が含まれているからである。伝統を同じくする時代の隔たりを持つ地平同士には、途中の時代という両者をつなぐものが介在するのだ。伝統の中で伝達されてきた経験は、伝達の途中で変容することがあっても、一貫してつながっている。特定の経験が切断されてしまったとしても、それに隣接する経験が維持されていれば、切断されてしまった経験も間接的に保存され、維持されることになる。テキスト理解の伝統は、テキスト群の理解とつながっているので、相互に維持しあっている。一度切断されてしまっても伝統に根付く経験は復元される可能性を持っている。それゆえに、同一伝統内での時間的隔たりを持つ地平同士は、相互に異なっているとはいえ、一貫してつながっているといえるのである。

それに対し、同時代であるか、あるいは異なった時代であるかにかかわらず、空間的に隔絶された地平同士の間には、同一伝統内での地平同士が持ちうる一貫性、連続性がない。それゆえに、この解釈学の立場に立ってテキスト解釈を遂行する過程は、空間的隔たりのある地平同士では成立しないことになる。言い換えれば、いわゆる異文化同士の関係にあるテキストと解釈者の間では、地平融合によるテキスト理解は成立せず、解釈者の地平に全面的に位置づける理解、あるいはテキストの地平に全面的に依存する、解釈者の主体性を放棄したテキスト理解にならざるを得ない、ということになる。これはいずれも一方的解釈であり、解釈学的に見て、テキストの真理主張 (要求) に沿った理解とは言い難い。

以上のようにテキスト理解にかかわる地平融合の過程を見てくると、これまでの解釈学ではテキスト理解一般のためには十分な理論を提供しているとは言えないことが判明した。そこで、次に伝統を異にする地平同士でのテキスト理解可能性について検討したい。これが可能になってはじめて地平融合一般がテキスト理解の条件だといえるようになるのである。それは異文化間コミュニケーションにも道を拓くことになる。

## 2. 新たな地平融合の過程の可能性

### (1) 共通の伝統を求めて

テキスト理解が地平融合によって成立するためには、テキストの真理要求を受け容れる必要があった。真理要求は同一の伝統にある地平にある者同士が共有できるものだった。それゆえに、地平の異なる者同士で解釈学的な意味でのテキスト理解が成立するためには、両者がともに属する伝統を新しく作らなければならない。ただし、それはいわゆる「作られた伝統」とは区別されなければならない。「作られた伝統」とはE. J. E. ホブズボームによる概念で、それは本来の伝統とは異なり、特定の意図を持っていかにも古くからの伝統であるかのように、仕組まれているもので、それは伝統文化の下に人々を結集させようとする意図を持つ共同体がその目的のために捏造したものだ。それは自然発生的文化ではなく、特定の目的のための設計思想を持ち、上から統制的に作られたものだ。だが、ここで言う新しい伝統とは、そのようなものではなく、むしろ、下から積み上げ式に、自然発生的伝統形成と同様に作られるものだ。テキスト理解の条件である真理要求を受け容れ、地平融合を成立させるためだという目的を持ってはいるものの、その内容については、なんらあらかじめ予想される過程も結果もなく、それをあらかじめ設計することはできない。それは、テキスト理解が依拠するテキスト群のあり方に関わっている。

共通のテキスト群を持つことが、新しい伝統形成という課題解決の鍵を握る。

相互に異文化であるところの伝統同士は、テキスト理解に関する限り、共通の準拠テキスト群を持っていない。伝統的日本思想のひとつである儒教思想を例にとれば、この思想を理解し、自らの世界観としてそれを生きるために、人は多くの準拠すべき基本テキストを持っている。その中には西洋哲学、とりわけ近代哲学のテキストは入っていない。逆に、西洋近代哲学を理解し、その精神を自らの世界観としてそれを生きるために、人は準拠すべき基本テキストを持っているが、それらの中に儒教の基本テキストは入っていない。したがって、それぞれから相手の思想文化を理解することは、それぞれが自分の思想の枠組みに相手を組み伏せて理解することになる。これは、理解された側から見れば、歪曲された理解になる。

共通のテキスト群を持つということは、相互に相手のテキストを準拠テキスト群に加えるということの意味する。しかし、異文化のテキストは準拠テキスト群に加えられるときに、従来の地平に制約されて理解され、受け容れられる。当然のことながら、同一文化伝統の中でさえ、あるテキストが準拠テキスト群の一つとなるためには、かなりの時間を必要とする。古典として受け容れられるための時間である。それゆえに、異文化の中では古典であっても、自文化の中では新しいテキストのひとつに過ぎない。したがって、それはいきなり準拠テキストとして機能することはできない。

そこで必要になるのが、相互にその新しいテキストがどのような意味で古典であり、どのような意味でテキスト解釈のための基盤となりうるのか、ということについて相互に説明し、それを自文化内でのテキスト理解のための準拠テキストとして受容することが持つ積極の意味を理解するように説得し合うことである。このコミュニケーションが新しい伝統を作るためには不可欠である。だが、このコミュニケーションには困難が伴う。

### (2) 非対称な関係

一般にコミュニケーションを行う二者の間には、力の上下関係が存在する。完全に対等なコミュニケーショ

にはあり得ない。コミュニケーションのテーマに応じて、両者間には有利、不利の相対的關係が生じる。これは両者間の相対的關係であって、第三者が介在するとその關係に変化が生じるだけでなく、テーマに依存する關係であるので、テーマ相対的ということもできる。同じ二者間關係でも、環境や状況が変わればいかようにも変化する可能性がある。

異文化間で準拠テキストの採用をめぐるコミュニケーションをする際には、この力關係がその採用形態に関して大きな影響を及ぼす。

両者間での力の差を作り出す要因はたくさんある。中でも重要と考えられるのが、その文化的伝統が背負っている経済力、政治力、武力、文化的影響力（例えば、日本に対するかつての中国の力）、言語の通用力、などの社会的な力である。これらは必ずしもテキストの内容に直接關係がなくてもかまわない。自分の伝統が背景にする社会の持つ相手との相対的關係に応じて、優位だったり劣位だったりする。テキストのテーマによって相対的關係が逆転する場合もある。日米關係では多くの分野のテキスト理解でアメリカが優位にあるのに対して、アニメ・マンガの分野では日本が優位に扱われたりすることもある。

以下、わかりやすくするために、優劣がはっきりしている二者間でのコミュニケーションを模擬的に考えて（シミュレーションして）みる。

優位にある側は、劣位にある側の準拠テキストを自らのテキスト理解の基準とする準拠テキストには積極的に加えない。むしろ、従来どおり相手のテキストを、古典であっても自らの地平に位置づけて理解する。劣位側からのコミュニケーション努力には困難が多い。第一に言語の問題がある。コミュニケーションを媒介する言語は優位側のものが使用される。劣位側は自らの準拠テキストを説明する概念を優位側の概念に合わせて使用しなければならない。劣位側は優位側の概念にない概念は表現することができず、自ら優位側の地平に位置づくように、変形して伝達してしまう。第二に、コミュニケーションが成立したかどうかを判定するのが優位側だ、という事情がある。劣位側は優位側の評価に依存せざるをえないのだ。第三に、コミュニケーションの場、そしてそのあり方が優位側のルールに則って設定されることである。それゆえに、そのルールに乗らない伝達内容は、はじめからテーマにならない。例えば、日本特有の事象を日本内部の展開に従って表現しようとする理論は、特に日本文化に興味を持つ日本研究者以外からは関心を持たれない。

逆に、劣位にある側は、優位にある側の準拠テキストを積極的に自らの準拠テキスト群に加える。というよりもむしろ、自らの伝統的準拠テキスト以上に重要な基盤としてそれらのテキストを受け容れる。劣位側は新しい準拠テキストをあたかも聖典（*canon*）であるかのように扱い、自らの伝統的準拠テキストから批判的に理解しようとはしなくなり、文字通り準拠テキストとして機能させる。それらについての理解の仕方の蓄積についても同様の扱いをする。受け入れた新しい準拠テキストの標準的理解は、それが本来そこに一づいていた優位側からそのまま移植される。優位側からのコミュニケーションは劣位側にとって説得力を持つ。なぜならば、劣位側は優位側に追いつき、追い越したいという欲望を持っており、その手法を自分の側に求めるのではなく相手側に求めるからである。優位側からのコミュニケーションは劣位側からのそれとは異なり、相手に積極的に受け容れられる。それゆえに、そのコミュニケーションは容易である。なぜならば、上記の三条件がこの場合にも当てはまるのであり、上記とまったく逆に機能するからである。

以上、新しい伝統を形成するための準拠テキストの共有の実現のためには、更なる条件が必要になるのである。

### (3) 準拠テキスト共有の条件

準拠テキストを共有し、新しい第三の伝統を形成するためには、前節で明らかになったコミュニケーションの困難を取り除くことが必要である。

第一に、言語の非対称性の克服に努力すべきである。このことはすべての人が多言語の使い手（*multilingual*）

になることを意味しない。すべての人があらゆる伝統文化と直接的相互理解を持つ必要はないからである。むしろ、ひとつの文化的伝統の中に均衡の取れた他言語理解を実現すればよいのである。地球規模での文化的相互越境が盛んになっている現在、どの文化圏も自分や隣接する狭い文化圏内部だけの地平に留まり、世界を理解することは許されない。バランスよく多くの言語を学び、それらの言語を使った地平融合に基づくテキスト理解を自国語で表現する努力をすべきである。

第二に、コミュニケーションの評価を双方が行うべきである。コミュニケーションはあらゆる意味において一方的ではない。双方の評価をつき合わせ、納得が行く一致点を見出す努力をすべきである。

第三に、コミュニケーションルールは多様であるべきである。世界標準という唯一のルールが機能していたほうが、統一的にコミュニケーションを行うことができると考えられるかも知れない。統一ルールが既存ではなく完全に新しく作られるのであるならばよいかもしれない。しかし、どのルールにも公平に配慮されたルール作りは困難だろう。このことを考えれば、二者間でそれぞれの既存ルールを使用し、その結果のずれを相互に認識しあって、調整するということが現実的だろう。三者以上の文化的伝統を唯一のルールで融合させてしまうのは、乱暴なことである。地平融合はまずは二者間の問題として丁寧に行われるべきである。

さらにあえて条件に付加すれば、第四に、優位側は積極的に自己変容の努力をすべきである。そもそも地平融合は解釈者の変容を必然的に引き起こすゆえに、自己変容を求める。非対称な関係にあつて、自らは最小限の変容に留め、相手に最大限の変容を要求するのは、解釈学的理解の本質に反する。自らをも伝統との関係において相対化し、変容を受け容れることこそ、精神科学に相応しいテキスト理解に向かう態度ではないか。

以上の四条件を新しい伝統を形成するための条件と考える。

### 3. 結論

ガダマーの明らかにしたテキスト理解にまつわる地平融合は、同一伝統内にある解釈者とテキストの関係に限定される。だが、上記四条件を満たせば、異なる伝統に属する解釈者とテキストの関係にあつても、テキストの真理要求を受け容れ、地平融合による解釈学的理解が成立する可能性が開ける。